

疫学部会報告(要旨)

重松逸造 (国立公衆衛生院 疫学部)

1. 研究の目的

スモンを疫学的に研究することにあるが、具体的には次の3点を明らかにすることである。

- 1.1 スモンの発生と蔓延の実態を全国的に把握すること。
- 1.2 スモンの病因と発生条件(宿主要因, 環境条件など)を疫学的に解明すること。
- 1.3 スモンの予防法を確立すること。

2. 研究の方法

- 2.1 スモン患者全国実態調査 昭和44年度には昭和42, 43年の2年間に全国の医療機関に受診したすべてのスモン患者ならびに同容疑患者について、当協議会より配布した調査個人票を作成するよう、厚生省の協力を得て各都道府県、指定都市の衛生部局に依頼したが、昭和45, 46年度には一部を改変した調査個人票を用いて、昭和44年1年間と45年6月末までの初診患者(容疑例を含む)は同年9月末までに、また45年7月分より現在までの初診患者には毎月分を翌月末までに提出するよう依頼した。
- 2.2 スモン患者のキノホルム剤服用状況調査 当協議会臨床班に協力して実施した調査で、昭和45年10月に臨床班員20氏を対象に、確実なスモン患者で、神経症状発症前後の服薬状況の明らかなものに限り、患者の病状とキノホルム剤服用状況の調査を依頼した。
- 2.3 全国スモン患者のキノホルム剤服用状況調査 全国の医療機関を対象に、2.2と全く同じ方法による調査を依頼した。
- 2.4 スモンの発生要因調査 疫学部会員が当協議会発足当初よりスモン多発地区において各個研究的に実施してきている調査で主として case history study の手法による宿主要因調査や生活環境要因調査、あるいはスモンとキノホルムの Dose-response やスモン発生の Time-space relationship などの検討が含まれる。

3. 研究の結果

- 3.1 スモンの発生と蔓延の実態 昭和47年2月末までに本協議会に報告されたスモン患者実数は9131名(確実5770名, 容疑3361名)であるが、発病(神経症状発現)の年次別に見て最も多発したのは昭和44年の2312名(確実1459名, 容疑853名)である。スモ

ン患者を人口対率でみて、女は男の約2倍、年令的には60才台にピークがあり、また地域的にはすべての都道府県に発生がみられるが、近畿、中、四国が特に高率となっていた。職業別には医療従事者、事務従事者、家庭の主婦の発生率が高い。

3.2 スモンの病因と発生条件 昭和45年9月8日に行なわれたキノホルム含有製剤の販売中止および使用見合せの行政措置は、疫学的にいて全国的規模で行なわれた一種のProspective study であるが、その結果スモン患者の発生は急減した。(下図参照)このことはキノホルム剤がスモンの発生と直接あるいは間接に関係のあることを意味しているが、スモンの発症とキノホルム投与量の間Dose-response relationship が成立することも全国調査および各個研究のいくつかで認められており、両者の間の因果関係を示唆しているといつてよい。スモン発症に関連する宿主と環境の諸条件については既に多くの要因が明らかにされている。

3.3 スモンの予防 キノホルム剤に対する上述の行政措置が極めて有効であったことは明らかである。

4. 今後の問題点

- 4.1 キノホルム非服用スモン患者 (全国調査でスモン患者の約15%に存在)の検討
- 4.2 Dose-response の詳細な分析、特に小量発病者の問題
- 4.3 スモン発病条件の再検討 (性差、年令差、地域差等の説明)
- 4.4 スモン患者の追跡調査 (特にキノホルム服用量にみた病状経過と予後)

